

Ohizumi Extension

建築・自然・土木構築物からなる「人工地層領域」の提案

Ohizumi Extension

An Architectural Proposal of "Artificial Stratum Area"

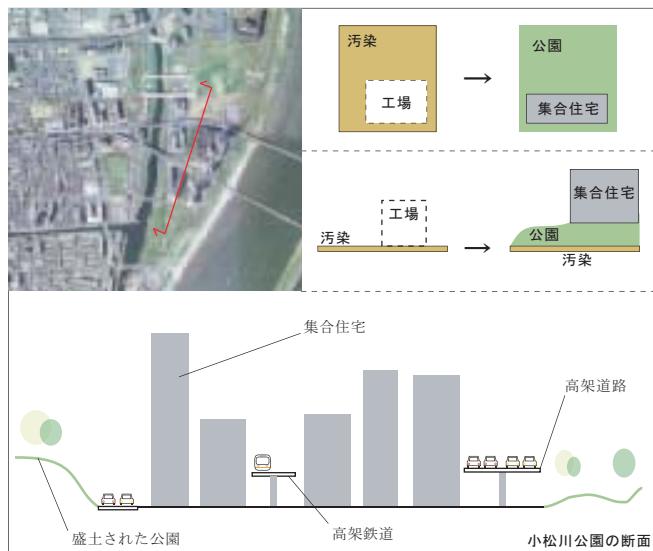


図2. 小松川公園周辺写真

Ohizumi Extension

建築・自然・土木構築物からなる「人工地層領域」の提案

図1. 小松川公園

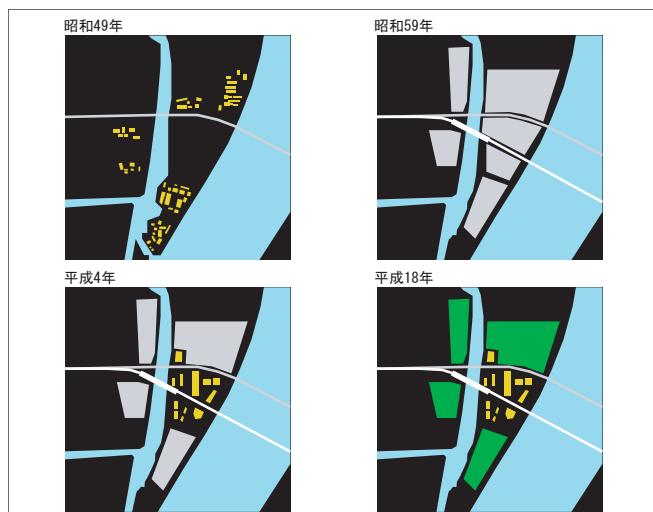
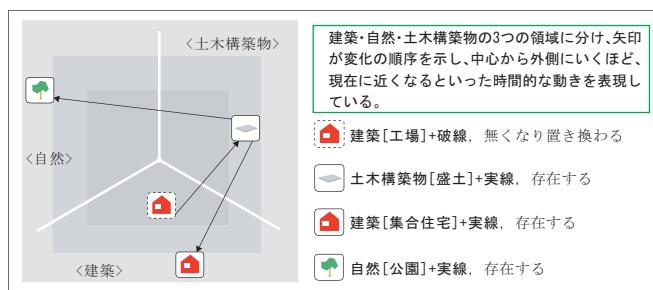


図3. 小松川公園の変遷



はじめに 都市には、周囲の環境に対して、スケール・形状・性質等の点で著しく異なる要素が併存する場所がある。それらは、過去の再開発や河川等の埋立て造成、都市インフラ整備等の計画によって、それまでその地域を構成してきた環境とは異なったスケールや性質のものが重ねられ、周辺との差異によって人工的で複雑な地形のようなものが発生している場所とみることができる。また、それらの都市空間には、計画によって事後的にやむなく発生し、周辺から切り離され放置されているような場所も少なくない。そこで本計画では、都市空間を構成している建築・自然・土木構築物などの環境の変遷とともに、人工的な地層をつくりだしている場所を分析・検討し、そこから読みとられる環境どうしの関係を反映させた設計プロセスを提案する。

都市空間における「人工地層領域」の捉え方 都市空間を、建築・自然・土木構築物などの環境の変遷から捉えた場合、いくつかの環境が地層のように積み重なり、人工的な地形をつくりだしているような場所を挙げることができる。本研究では、これらを、「人工地層領域」とし、その構成的なあり方を検討する。また、都市的なスケールで人工的な地形を成している場所の、時間的な変遷を分析する。例えば、過去に大規模な開発行為が行われた江戸川区の小松川公園（図1.2）では、工場（建築）の跡地が土壤汚染されていることがわかり、その場所に盛土（土木）がされ、一部分に大規模な集合住宅群（建築）が建てられた。その他の場所は、公園（自然）へと変わっていった場所である（図3）。これらの環境の動きを「人工地層領域」として取り出した（図4）。この例では、この場所が変化することになった要因として、盛土などの土木的な操作やスケールをもつ環境が、場所の変遷における初期の段階で挿入されていることがあげられる。このように、「人工地層領域」では、スケールや性質の異なる環境が時代を追うごとに積み重なっている。しかし、時代ごとに計画され重ねられた環境であるため、現状の周辺環境と間でスケールや性質の違いが生じており、周辺地域との関係が希薄な場所となっている。

図4. 小松川公園の環境の動き

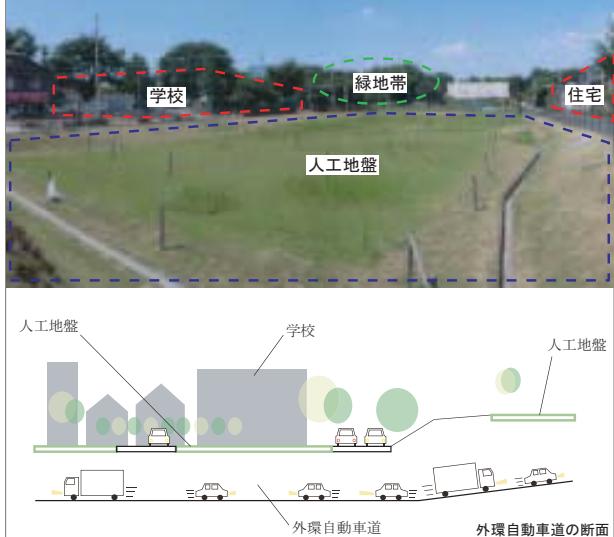
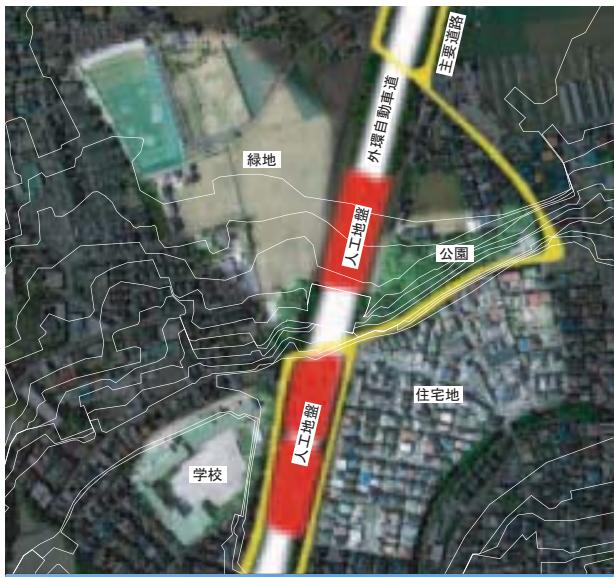


図5. 敷地周辺の現状

対象敷地の抽出 敷地周辺は、既存の丘状の地形に対して、外環自動車道というリニアな土木構築物が直交するように地下を通ることで、高低差のある人工地盤が直線的に点在する特徴をもつ。そのため、地盤の周囲には外環自動車道によって無造作に切り取られたかのように、学校や公園といった周辺環境が存在する。そして、周囲への環境的な配慮などからやむなく発生した人工地盤が、周辺に対して関係をもつことなく、ただの蓋のようなものとして周囲から浮いた状態で放置されている（図5）。また、人工地盤の両脇を通る地域の主要道路も、丘の手前で途切れたようになっているため、迂回するルートがとられているが、交通量が多く度々渋滞が生じている。さらに当地は、近い将来補助230号線や地下鉄大江戸線の延伸、駅の建設が計画されているため、今後発展する兆しのみられる敷地でもある（図6）。しかし、こうした郊外の場合、駅周辺が更地として造成された後に開発されることが多く、その結果形骸化した駅前空間が生じる恐れがある。こうした分析及び想定を基に、この場所の環境を捉えなおし、〈人工地層領域〉の新たなあり方を提案する。

Ohizumi Extension 本計画では、交通渋滞を解消するための新たな道路や、今後建設される予定の地下鉄の駅へのアクセスを考慮し、周辺地域に広がるように、図書・ギャラリーエリア、地下商店街エリア、市民ホールエリアの3つのエリアに分け建築を計画する（図7）。また、土木的なスケールや、過去に起きた地盤の造成などの土木的な操作に、緑地や公園、人工地盤といった周辺環境が反応し、積極的な関係をもつ空間を考える。

本計画では、建築と既存の地形や植栽を土木的なスケールや操作により相互に関係づける、〈人工地層領域〉の構想を提案した。このように、敷地の時間的な変遷から読み取れる構成を捉え、設計に組み込むことで、多様な空間的性質に満ち、周辺地域と積極的な関係をもった都市空間を生み出すことが可能になると考える。

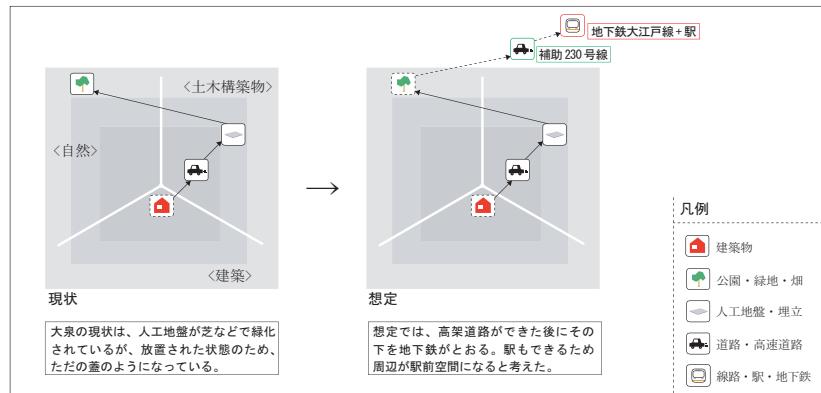
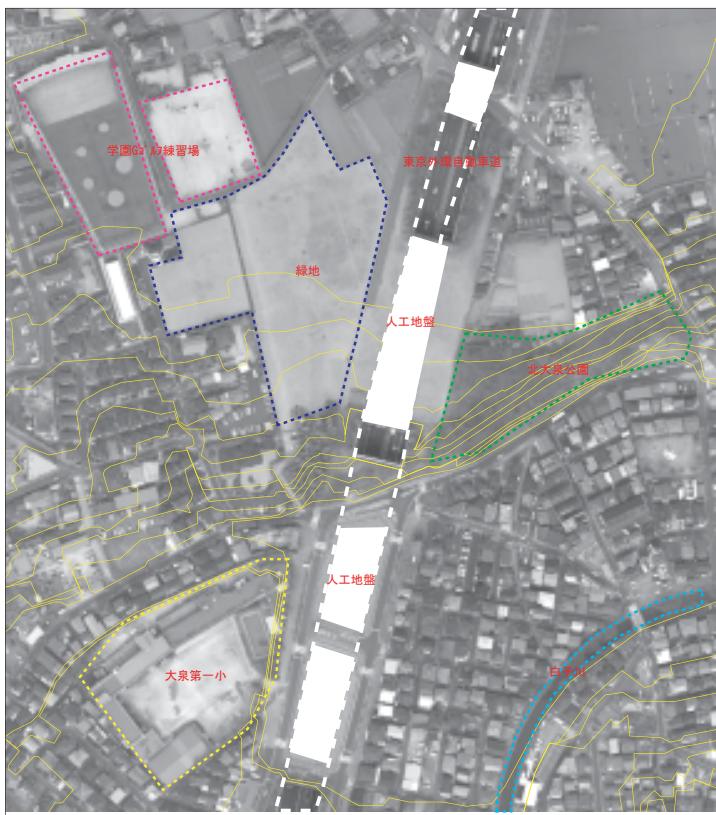


図6. 敷地の環境の動き



敷地周辺の航空写真

敷地周辺には、北大泉公園・大泉第一小・緑地などが東京外環自動車道によって、切り取られたように周囲に存在している。また、人工地盤も周辺との関係が薄くただの蓋のようになっている。

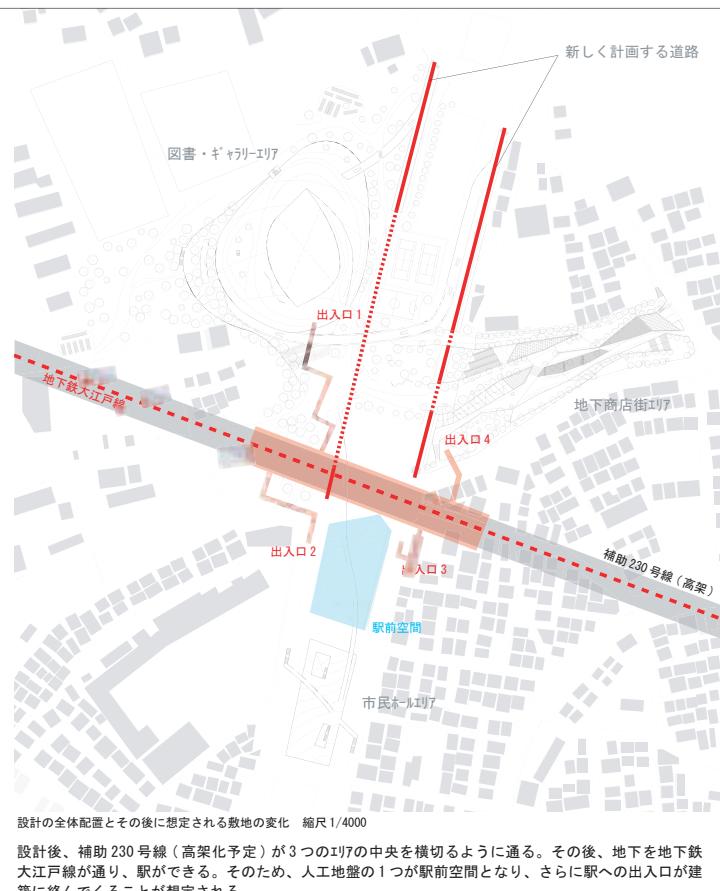
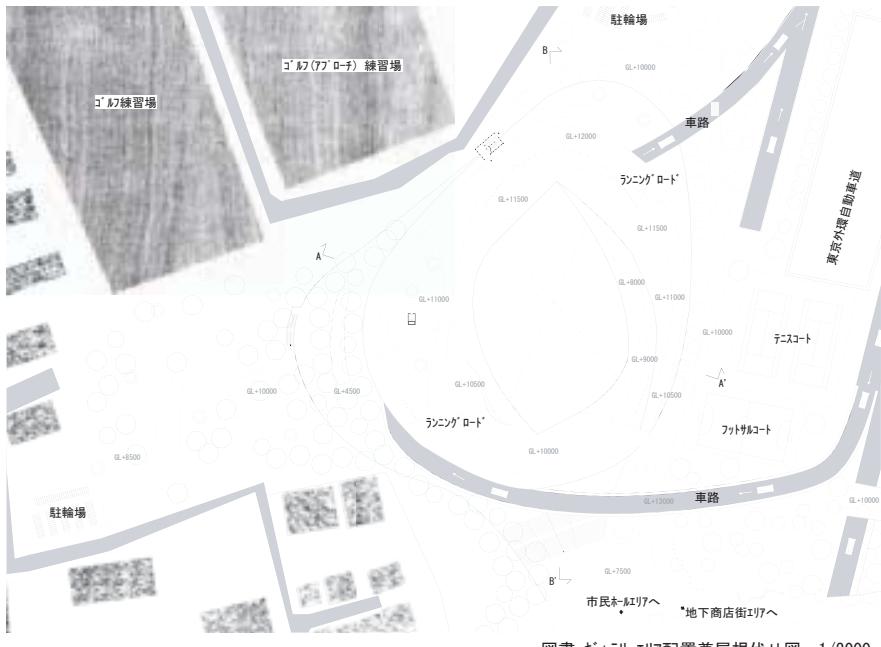


図7. 敷地の想定と全体配置

設計後、補助230号線（高架化予定）が3つのエリアの中央を横切るように通る。その後、地下を地下鉄大江戸線が通り、駅ができる。そのため、人工地盤の1つが駅前空間となり、さらに駅への出入口が建築に絡んでくることが想定される。

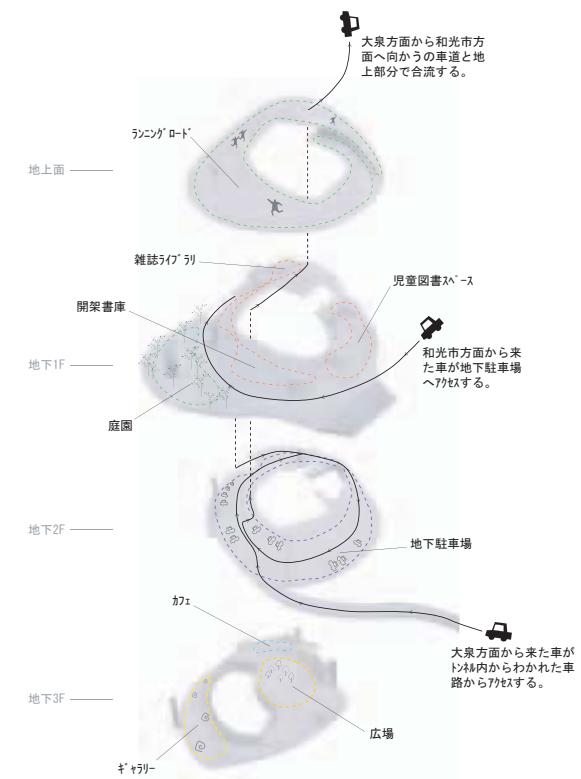


図書・ギャラリーエリア配置兼屋根伏せ図 1/2000



既存の植栽が建物の内外に引き込まれ、新たな広場や庭園をつくりだす。

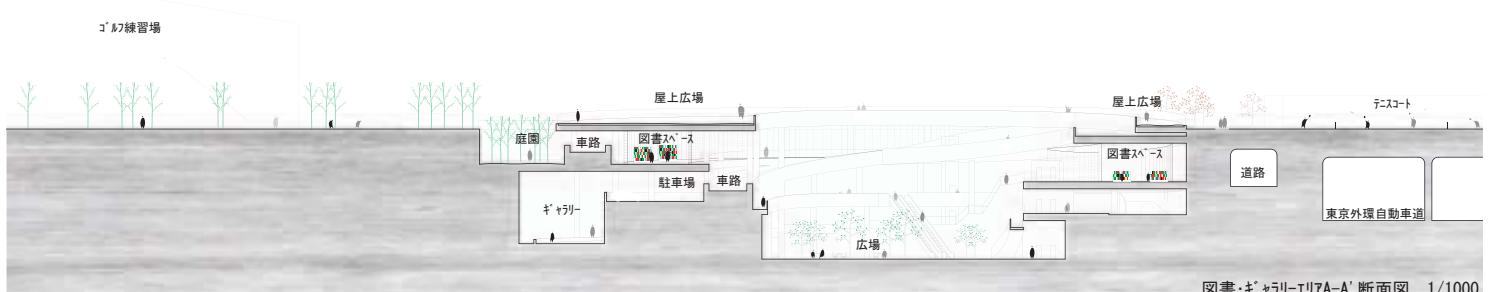
【図書・ギャラリーエリア】 丘陵地帯という地形を残し、かつ将来地下鉄駅の出入口として利用できるように、建築の大部分を地下化する。図書やギャラリーなどを配した半外部空間が地下に入り込み、新たに計画した道路から派生した車路と一体となることで、土木と建築による立体的な建物の構成となる。さらに、中央に設けられた大きな吹抜けと、スロープ状の床が、断面的に広がりのある空間をつくりだす。また、既存の竹林を活かし、建築の内外に引き込むことで、周間に新たな広場や庭園などの場所をつくりだすことができる。地上面では、近接するゴルフ場との関係をもたせるために、テニスコートやフットサルコート、屋根面にはランニングロードを設け、新たなアクティビティを引き出す。



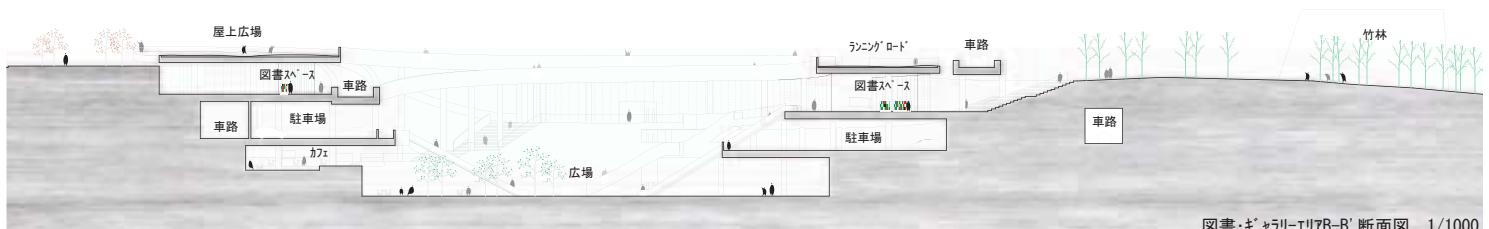
図書・ギャラリーエリアの「ア」イデアム：建物全体がスロープ状の床で構成されており、各フロアは内部・半外部を併用しながら配置されている。



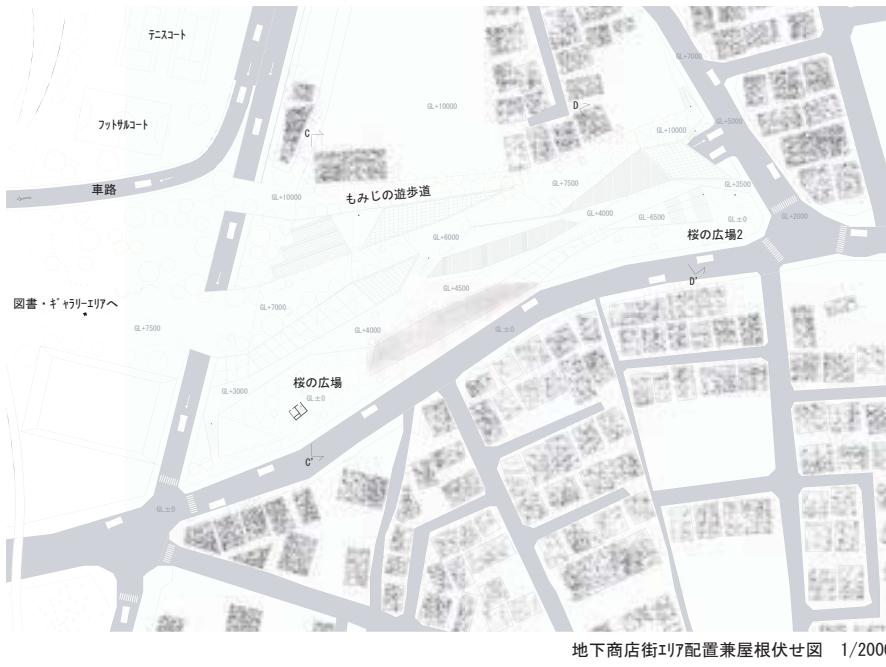
市民ホールエリアの屋根面と橋を介して、動線的に繋がっている。



図書・ギャラリーエリアA-A' 断面図 1/1000



図書・ギャラリーエリアB-B' 断面図 1/1000



地下商店街エリア配置兼屋根伏せ図 1/2000

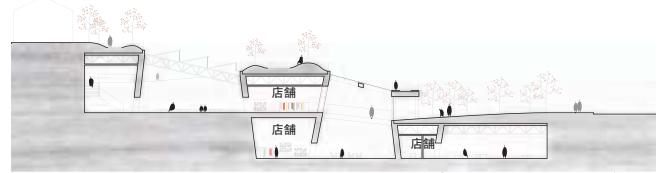
[地下商店街エリア] この場所は、勾配が急なため既存の公園はあまり利用されていない。そこで、地上部分は既存の植栽を活かし、等高線に沿ってエアローム状に続く緩やかな遊歩道を計画する。さらに、図書・ギャラリーエリアへの動線的な繋がりをもたせることで、様々なランドスケープを楽しむことができる。地下部分は、周囲に住宅街が広がっているため、商業施設を配置し、かつ将来の駅の出入口へのアクセスを考慮し、周辺に広がっていくような構成とした。また、高低差のある遊歩道沿いの建築の屋根は、ガラスやソーラーパネルなどの様々な材料で構成されており、歩きながら内部の様子が見えたり、地下部分に光が差し込むようになっている。



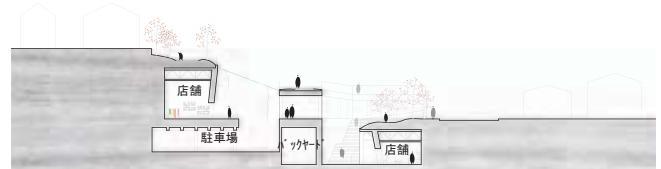
地下商店街エリアのイメージ図



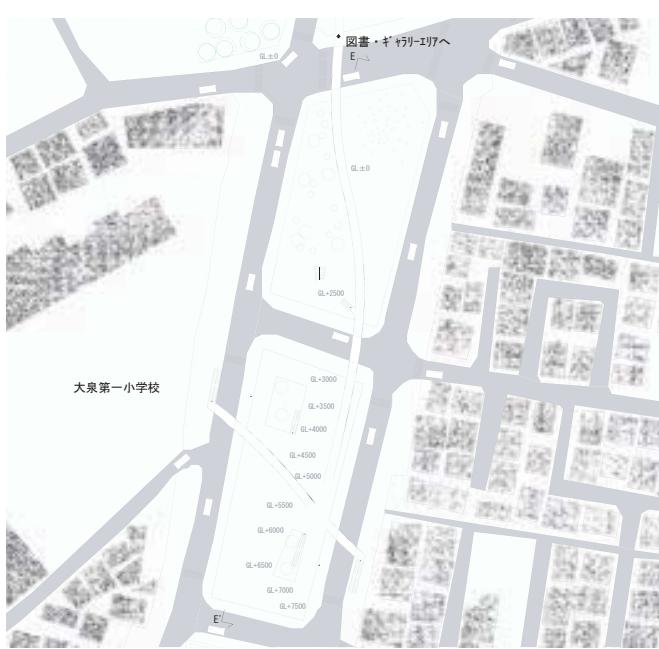
地下商店街エリアの外観パース：ガラスやソーラーパネルなどの材料によって構成されているため、歩きながら内部が見えたり、地下部分に光が差し込むようになっている。



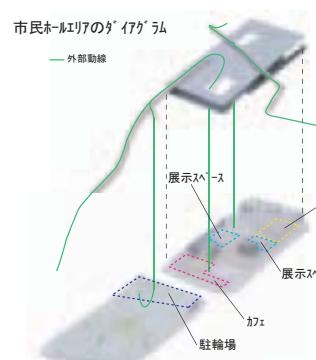
地下商店街エリアC-C' 断面図 1/1000



地下商店街エリアD-D' 断面図 1/1000



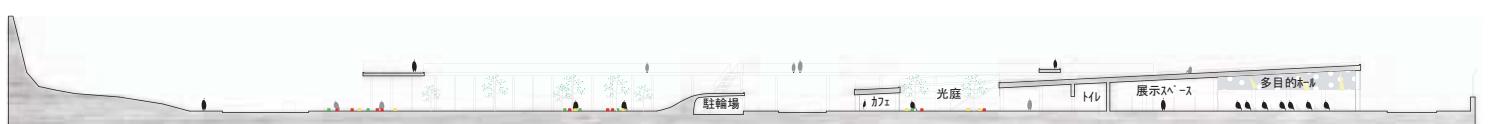
市民ホールエリア配置兼屋根伏せ図 1/2000



[市民ホールエリア] 小学校や住宅街などに隣接する2つの人工地盤は、交通量の多い道路によって切り離され、周囲との関係が希薄になっている。そこで、外部から直接アクセスできるようにすると共に、小学生や地域住民が利用できるような展示スペースや多目的ホール、カフェを計画した。また、1つの人工地盤は、将来ロードなどの駅前空間としてバスが停車することを考慮し、駐輪場を併設した広場とした。周囲を道路で囲まれているため、外からの視線を防ぐことを考慮し、ファサード面の仕上げをパンチングメタルとしている。



周囲からの視線防ぐことを考慮し、ファサード面をパンチングメタルとしている。



東京外環自動車道

市民ホールエリアE-E' 断面図 1/1000